

# ふるさとの 其の52 誇り

## 干ばつと水害を越えて②

### 明治29年の水害と前御勅使川の終焉

ま え み だ い が わ  
し ゅ う え ん

市の北部を流れる御勅使川は、古くから暴れ川として知られ、昭和時代まで数々の洪水を引き起こしてきました。とりわけ明治29年（1896）の水害は、御勅使川と前御勅使川、釜無川の堤防が決壊し、釜無川左岸の信玄堤を破り、竜王までも飲み込むほどの甚大な被害をもたらしました。今日は、御勅使川の治水の転換点となった、明治29年の水害とその後の復興・発展の足跡をたどりま。



石縦堤（有野）  
現在は堤防の役割を終え、道路として利用されている。



芦安堰堤アーチ式工事写真  
日本で初めてコンクリートを使用して造られた本格的な砂防堰堤。日本砂防史の転機となった。



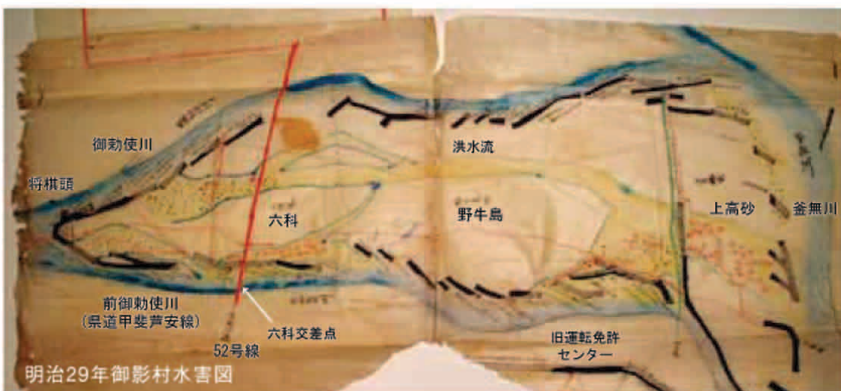
穴水朝次郎（「八田村誌」）

穴水朝次郎の墓 下高砂広照寺  
穴水朝次郎は県の土木課長も勤め、県内の治水事業に尽力した。墓誌には明治29年の水害の際、日夜堤防上で寝起きし、復旧に尽力した内容も刻まれている。

明治29年9月、4日から12日まで降り続いた豪雨によって、県内の諸河川が氾濫し、各地に大きな被害が出ました。その被害状況は、死者33名、堤防決壊329箇所、延長8,625間（約15・7km）、負傷者45名、流失家屋約500戸を数えました。

（『山梨県水害史』）

御勅使川流域の被害も大きく、有野の石積出一番堤から八番堤以下、裏田堤までが決壊し、さらに下流の堤防も決壊しました。その年の山梨日日新聞9月19日の記事には、最も被害が大きかった地域として御影村（現在の六科、野牛島、上高砂地区）が挙げられ、御勅使川、釜無川が決壊した夜、



黒色線が堤防、灰色線が堤防の流失箇所、黄色は洪水流、朱色が被災した家屋を示しています。



明治29年水害後の前御勅使川（齋藤善一氏蔵） 明治29年水害後の上高砂新居（齋藤善一氏蔵）

左の写真は前御勅使川を写した貴重な写真。現在の旧運転免許センター北側付近を写したもので、右端の林は上高砂氏神の神明神社。

暗闇のなか人々が木に登り、樹上で夜を明かして難を逃れた状況が報告されています。この水害の被害状況をまとめた御影村の水害図には、御勅使川・前御勅使川、釜無川の堤防が決壊し、数々の家々が被災した状況が描かれています。

この洪水が契機となり、下高砂出身の県会議員であった（故）穴水朝次郎氏が、日夜を惜しまず対岸にある村々の反対を説得し、水害の抜本的対策として前御勅使川を締め切ることが決定されました。その方法は、将棋頭から徳島堰まで330間（約600m）に渡る石積み（石縦堤）を築くものでした。工事は明治30年に着手され、翌明治31年に完了し、荒ぶる前御勅使川の長い歴史に幕が下ろされたのです。

その後大正時代には、御勅使川上流の山

間部に、芦安堰堤をはじめとするコンクリートを利用した砂防堰堤が、国の直轄事業として全国に先駆けて築かれました。昭和7年からは、県事業として源堰堤から堀切付近まで根固め工が整備されたことにより、下流域での洪水はほとんどなくなりました。流路の安定によって、昭和初期には、前御勅使川の旧河川敷に四間道路が敷設され、道路沿いに家や店舗が建てられるようになり、今日見られるような発展した街並みが作られてきたのです。

水害は、いたましい負の記憶ですが、現在の安全な暮らしの礎を築いた先人たちの知恵と功績を示すとともに、防災への備えの大切さを現代に伝えているのです。

註）前御勅使川：ほぼ、現在の県道甲斐芦安線のルート上を流れていた御勅使川の旧流路。明治31年石縦堤の建設により、実質上薩河川となった。